

命に絡む

小嶋 祥三

ちょっと大きなタイトルだが、人は一生のうちに何回か自他の命の危険に絡むことがあるだろう。わたしの場合、最近では定期健診で肺がんが早期に見つかったことだ。通常のX線検査では見つけにくいといわれているので、大変に幸運だった。見逃されていたら、翌年の定期健診までにはがんは進行していただろう。肺がんは自覚症状がでる頃には手遅れなので恐ろしい。肺がんについては別に書いたので、今回はもっと昔の話を書く。

中学3年の冬だった。わたしは同じクラスの関川弘泰君と一緒に下校した。帰る方向が一緒だったのだ。かれは立派な額の持ち主だったので、デコとあだ名されていた。その日は雪が降っていた。当時、京王線には警報機はついてしたが、遮断機はなかったのではなかろうか。通常なら警報機は勢いよくカンカンとなっていただろう。しかし雪が警報機につきカサカサといった感じの音になっていた。わたしは雪のせいでこんな音になったのかと思ったが、電車が来ることは意識になかった。踏切の中に2、3歩踏み込んだ時に、関川君が「小島（当時、この島の字を使っていた）、危ない」というのを聞き、わたしはすぐに引き返した。わたしは平静を装っていたが、内心ゾツとした。中学を卒業してから、関川君には一度も会っていない。かれがその後どのような人生を歩んだのかも知らない。恐らく、かれはこのエピソードを覚えていないだろう。しかし、もし関川君に会うことがあるならば、感謝の気持ちを伝えるつもりだ。

鉄道つながりでもう一件。霊長類研究所に在職中だった。やはり雪の日で、わたしは徒歩で研究所に向かった。以前、タイヤにチェーンをつけていたが、乗っていた自動車が電柱にぶつかったことがあったのだ。通勤では名鉄の線路を越える必要があった。その日は普段は通らない人通りの少ない踏切を渡ろうとしていた。恐らく自動車を避けようと思ったのだろう。わたしは踏切内で積もった雪に足を滑らせ、スッターンと勢いよく転んだ。肘を打ったが、幸い頭は大丈夫だった。研究所へ向かう道々、頭を打つ→気を失う→電車が来る、といった考えが浮かんで来て、ヒヤツとした。

次は父とのことだ。大学生の時だったか、わたしは庭に出て、バットの素振りをしていて。父もでてきてわたしのすぐ脇を通り過ぎようとしていた。わたしは戯れに父の頭をボールに見立て、バットで打つまねをしようと思った。無論、父の頭のはるか手前でバットを止めるつもりでいた。そしてバットを振ったのだが、わたしが思っていたよりもずうっと父の頭の近くでバットは止まった。父は何事もなかったように通り過ぎていったが、わたしは恐怖心すら覚え、ゾツとした。精神分析をかじっていたので、父親と男の子の関係、無意識の存在などが頭に上ってきた。『カラマーゾフの兄弟』を読むと、イワンが「父の死を望まない奴はいない」と叫ぶ場面、忌み嫌っているスメルジャコフに意志に反して声を掛けてしまう場面があるが、それらの個所を読むたびに、わたしはこのバットの「事件」を思い出す。